

mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

3

[ムンディ] No. 90
March 2021

特集

地球ギャラリー

写真で

旅する世界

～ファインダー越しの途上国～



未来を
担う一歩

Mongolia

Federated States of Micronesia

環境が自然を、暮らしを、脅かす

People's Republic of Bangladesh

Islamic Republic of

取り残された村

Malaysia

失われる森
共存の道は

彼の人生、彼の夢

Republic of Kenya

ポジティブのすすめ

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 29
- 04 特集 地球ギャラリー
写真で旅する世界
～ファインダー越しの途上国～
 - 04 12年越しの結婚式 ウガンダ 桜木 奈央子
 - 10 取り残された村 パキスタン 清水 匡
 - 14 ポジティブのすすめ ケニア 渋谷 敦志
 - 18 彼の人生、彼の夢 バングラデシュ 吉田 亮人
 - 22 「地球ギャラリー」の特設サイトがオープン!
 - 24 「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」イベントレポート
一枚の写真が開く世界の扉
 - 26 世界の課題 表現してみよう!
JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト
国際協力まんが大賞
ビデオブログコンテスト
アバター/デジタル漫画コンテスト
- 30 JICA海外協力隊がゆく Vol. 28
東ティモール
- 32 ザ・研修⑮
仲間とともに研修の成果を深める
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑩
- 36 JICAカレンダー
- 37 information
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.30

*掲載されている情報は取材当時のものです。



これまでに全149回の連載を数える「地球ギャラリー」。途上国に暮らす人々の姿をありのままに伝える写真家の思いが詰まっている。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol. 29

考えを言葉に換える 大切さについて

文・ヤマザキマリ

私がイタリアに暮らし始めたのは10代の半ばで、その後イタリア人と家族を持ち、コロナ禍によって日本で足止めになるまではイタリアと日本を短いスパンで往復する暮らしを続けてきました。イタリアと日本というふたつの国は、南北に細長い火山列島という地理的な意味でも、職人気質の人が多いという意味でも、そしてそのほかにもさまざまな相似点があります。長い間この国との行き来をくり返す中で意識の切り替えが必要なのは、家族や社会における人々との接し方です。

日本では基本的に思ったことを何でも口にするのは美德とされています。何か思うことがあっても言葉にすぐには変換せず、耐えられそうな案件であればじっと我慢する。男女の喧嘩など見ていると、日本の女性は怒ると相手の男性といつまでも口をきかなくなる、という態度を取りますが、あのような態度はイタリア人にはめつたに見られませんか。納得がいこうといくまいと、とりあえずは険悪な空気の淀んだ空間からは一緒に出て行く。彼らにとって喧嘩は一つのコミュニケーションの形態であり、おたがい熱りが冷めるまで感じたこと、言いたいことをぶつけ合うのは当たり前なのです。

イタリアでの暮らしを始めた直後、初めてイタリア人男女の喧嘩を間近に見たときはその身振りと言葉の激しさに愕然としてしまいました。しばらくすると、イタリアではつきりと思表示をしなければ、円滑な社会生活を送っていけないということに気づかされました。黙っていることがなんの解決策にもならないのです。だから、喧嘩も彼らにとってはおたがいの意見の齟齬を理解するための手段の一つであり、面倒だし嫌な気持ちにはなるけれど、避けて通ろうとする人はいません。私と夫の喧嘩もそうですが、燻ったまま終わっても15分後には「もうやめよう。平和第一」と握手を交わします。感じたこと、思ったことは言葉で言い表さず、不穏な感懐をため込んでいくのは

自分のメンタル面での健康にはよくない、という信念のようなものがあるのでしょうか。

かたや日本では逆に、思ったことすべてを言語化することは人としての礼儀に欠くこと、ととらえられている節があります。愛情表現や褒め言葉もそうですが、近い人ほど言葉にはせず相手に察してもらうという独特のコミュニケーションが定着しています。できればあまり激しい感情や動揺、そして失意や絶望とは向き合いたくない、と身構えている人がこの国には多いように感じますが、それもまた島国という土壌の日本が長い年月をかけて、国民性や社会になじむ方便として培ってきたことなのかもしれません。

でも、精神というのはさまざまな感情を抱くという経験を怠ると脆弱になってしまいます。人によってはそれをドキュメンタリーのような映像にしたり、写真にしたり、文章に換えたりすることで、人々に向けて発信していますが、そういった表現をすることも、そして受け入れることも、私たち人間にとって欠かしてはならない授業なのではないかと思えます。いじめのような阻害行為も、クーデターや紛争も、根幹にあるのは自分たちの思い通りにならない社会や人への不平不満です。でも、さまざまな人々とたくさんコミュニケーションを積み重ね、知らないことを積極的に受け入れ、あらゆる情報から目をそらすずに向き合うことは、われわれ人間が地球という惑星で生きていくうえで避けてはならない、人類の成熟への大事なプロセスだと思っています。



イラスト●中村知史

ヤマザキマリ

漫画家・文筆家。東京造形大学客員教授。1967年東京都生まれ。84年に渡伊、フィレンツェ国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。その後エジプト、シリア、ポルトガル、アメリカ、イタリアなどさまざまな国で生活を体験。2010年「テルマエ・ロマエ」で第3回マンガ大賞受賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。15年度芸術選奨文部科学大臣賞新人賞受賞。17年、イタリア共和国星勲章コマンドーレ授章。

特集 地球ギャラリー

写真で 旅する 世界

～ファインダー越しの
途上国～

途上国の日常や、
そこで暮らす人々の姿を
写真と文章を通じて伝える
本誌の連載企画「地球ギャラリー」。
読者に遠く知らない国の姿を見せ、
多くの思いを届けてきた。
今回は特別版として、
これまで掲載した中から4人の写真家に
記事の裏側にある撮影への思いを語ってもらった。

12年越しの結婚式 桜木 奈央子
取り残された村 清水 匡
ポジティブのすすめ 渋谷敦志
彼の人生、彼の夢 吉田亮人

12年越しの 結婚式



12年越しの結婚式 (2020年6月号掲載)

1980年代に内戦が起きたウガンダ。北部の町のグルに暮らすデニスさんは、2008年にソーシャルワーカーとして働くドリーンさんと結婚し、内戦後に帰還した子ども兵士のための職業訓練校で働いている。そんなデニスさんから「いつか結婚式をするから予定を空けておいて」と桜木さんが誘いを受けたのは12年前のこと。そして、20年1月1日、その日が訪れた。当日は多くの人たちが祝福の声を上げ、新郎新婦は友人たちと抱き合いながら、「結婚式ができる平和っていいね」と言葉を交わし、心ゆくまで食べ、笑い、踊った。楽しい時間をみんなで過ごせる幸せを切に感じた、12年越しの結婚式だった。

2020年6月号は
こちらから



結婚式の朝、ヘアメイクが完了した新婦ドリーン。



結婚式を挙げた教会。




ウェディングドレスに着替えたドリーン。



教会での挙式。



再会した旧友と抱き合う新郎デニス。



首都：カンバラ

ウガンダ


国名：ウガンダ共和国
通貨：ウガンダ・シリング
人口：4,272万人 (2018年、世界銀行)
公用語：英語、スワヒリ語、ルガンダ語



朝日に向かって走る子どもたち。

桜木 奈央子 (さくらぎ・なおこ)

1977年、高知県生まれ、横浜市在住。2001年からアフリカに通い始め、取材を続ける。雑誌や新聞にフォトエッセイや書評を寄稿。小学校から大学まで講演や授業も多数行っている。著者に『世界のともだち ケニア 大地をかけるアティエノ』（偕成社）、『かぼちゃの下で ウガンダ 戦争を生きる子どもたち』（春風社）などがある。



も、カメラをお守りのようにしてウガンダに通い続けている。

赤ちゃんだった子が今では立派な母親になり、自分の赤ちゃんを抱いてカメラに向かってほほ笑んでくれる。避難シェルターで一緒に焚き火を囲んだ子が青年になり、「あのときみたいに写真を撮ってよ」と無邪気に笑う。言われるままにフラインダーをのぞくと、過去と今この瞬間が交差し絡み合い、どこかへ向かっていくように感じる。それを未来と呼ぶのかもしれない。

生まれ育つ場所を自分で選ぶことはできなくても、どこかへ出て人と出会うことはできる。それを、たとえば写真に撮って他の誰かに伝えることもできる。写真は、別の生き方を疑似体験できる魔法の道具だと思う。

「なぜ、ウガンダなのですか？」と聞かれたら、それは「ここにしかない光があるから」。これからあの朝の光を探し続けたい。



参列者も楽しそうにスマホで撮影。



胴上げされるデニス。



2人の息子。結婚式のスピーチなどで立派に役目を果たしていた。



ブライズメイド(花嫁に付き添う女性)たち。新郎新婦の衣装に合わせて3回お色直しをした。



おめかしして参列した少女。

「なぜ、ウガンダなのですか？」

長年同じ国に通っている理由を尋ねられることがよくある。その質問に答えながら心の中に広がる風景は、いつも同じだ。それはウガンダに到着して初めての朝、バスの車窓から見た景色。

金色に染まった地平線、鳥たちが黒いシルエットになって飛んでいくピンクの空。朝の光の中で畑を耕す女性、すれちがうバイクタクシー、制服を着た子どもたちの姿が車窓を流れていく。

今すぐにバスを降りてこの土地を歩きたいという衝動に駆られた。ここで暮らす人たちと話してみたい。一緒に食事をしてみたい。今も20年前のその衝動に突き動かされ、ウガンダに関わり続けているのかもしれない。

実際に降り立ったその地には、内戦があった。それでも前向きに生きようとする人びとの姿を伝えたくて写真を撮り始めた。深く関わりすぎて自由に身動きができなかったことや、結局自分は安全な国に帰っていく外国人だという疎外感もなかったわけではない。で

JICAの取り組み

アフリカの東部、赤道にあるウガンダ。1980年代から20年以上にわたって内戦が続き、北部地域で約200万人の国内避難民が発生したが、治安回復に伴い2009年以降から帰還が進み復興・開発が進んでいる。“難民に寛容な国”としても知られ、全土に周辺諸国から約140万人の避難民が滞在している。JICAは、北部地域の開発をはじめ難民と地域の住民が安心して共生できる社会づくりなどに取り組む。近年は年4~6パーセントの安定した経済成長率を記録している。

取り残された村

Islamic Republic of Pakistan

[パキスタン・イスラム共和国] 写真・文・清水 匡

取り残された村 (2019年1月号掲載)

パキスタン北部、カラコルム山脈の裾野に位置するマンセラ郡。2005年の大地震、そして10年の大規模水害以後、多くの学校が再建されていない。住民が建てた校舎や青空の下で学ぶ子どもたちはいるものの、就学率の低さや学校中退、児童労働などの問題があり、子どもたちの教育環境の改善はなかなか進まない。とくに、女子生徒が置かれた状況は厳しく、就学への親の理解と適切な教育環境が必要だ。中国の巨額投資で都市の道路インフラが整備される一方、地方の子どもたちは取り残されたままだ。

2019年1月号は
こちらから



芯がすぐに折れてしまうため短くなるのも早い鉛筆。

青空の下が教室。この女子高の校舎は2005年の大地震で全壊した。現在、NGO国境なき子どもたちにより新しい校舎建設が進められている。



新しい校舎で勉強する女子生徒。



日本の支援で建設された新しい学校。



女性教員の不足で男性教員が女子高で教鞭をとる。女子生徒が学校に通いにくい理由となることも。



村人たちがお金を出し合って建てた学校。



険しい道を片道2時間かけて通学する生徒も珍しくない。



村人が建てた校舎で椅子や机がそろっていることはほとんどない。

清水 匡(しみず・きょう)

NGO国境なき子どもたち(KnK)職員兼人道写真家。大学卒業後、自然映画社に勤務し教育映画や自然科学番組の制作に携わる。1999年よりNGO国境なき医師団日本の映像部でアフリカやアジアの活動現場の撮影・編集を担当。2003年よりKnKに所属するかわら写真家として活動している。



パキスタン人は人懐っこい。文化や宗教上、女性は目を合わせてくれることは少ないが、男性は会うたびに握手する。日本では過激派やテロなどが目立って報道されがちだが、人びとに会うとそんなイメージはすぐに裏切られる。握手で2回シエイクした後も視線をそらさず手を握り続けられたときは、どれほど時間を長く感じたことか。

NGO国境なき子どもたち(KnK)は、2005年に同国で大地震が発生して以来、復興事業を実施しており、現在も女子教育の普及を目的とした学校建設事業に取り組んでいる。KnK職員としての私の仕事は、校舎建設候補の村々や建設中の学校、そして完成した学校を訪問し、プロジェクトの進捗をモニタリングすることである。子どもたちをはじめ、村人や教師、保護者への聞き取り調査も行う。子どもたちへのインタビューでは教科書的な答えが返ってくることが多い。それもそのはず、隣で先生や親がにらみを利かせて立っているのだ。しかし、子どもたちの姿や表情、彼らを取り巻く環境は真実を語っている。現場にいる私はNGO職員であると同時に目撃者でもある。支援とは組織に多くの力が集まってなし得るが、個人にできることは限りなく無に等しい。

JICAの取り組み

2億を超える人口を有し、アジアと中東の接点として重要な位置にあるパキスタン。近年は政情・治安が落ち着き、比較的安定した経済成長を維持している。JICAは、さらなる社会基盤の整備や、所得・地域・ジェンダーの格差の是正などに向けて、ポリオ対策・予防接種の強化、急激な都市化に対応するインフラ整備、国内産業の強化、さらには防災対策などの協力を展開している。



首都：イスラマバード



パキスタン

国名：パキスタン・イスラム共和国
通貨：パキスタン・ルピー
人口：2億777万人
(パキスタン統計省国勢調査、2017年)
公用語：ウルドゥー語(国語)、英語(公用語)

夕方、カクマキャンプの一角でバスケットボールの練習をする南スーダンからの難民。
制約の多い生活のなかで、スポーツが活力を与える。



ポジティブのすすめ

ポジティブのすすめ (2020年9月号掲載)

1992年にスーダン南部(現在の南スーダン)から難を逃れて越境してきた人びとは、ケニア北西部にあるカクマで暮らし始めた。四半世紀以上経った今、19の国籍の人たちが生活するも、人口の多数を占めるのは南スーダンからの難民だ。ここで生まれ育ち、アイデンティティの喪失に悩む者もいるなか、“ポジティブ”という言葉を多く耳にする。この言葉に胸を痛めるのは、私たちの意識に潜む難民へのネガティブな視点の裏返しなのかもしれない。

2020年9月号は
こちらから





南スーダンから歩いてウガンダに越境した難民たち。



独立後間もない南スーダンの学校。


JICAの取り組み

JICAは、南スーダンなどの紛争地で発生する難民・避難民に対して、人道と開発の連携をふまえ、難民流入により影響を受けるホストコミュニティに対する支援や難民・避難民の生計向上支援などを行っている。

地面に伏せる痩せこけた少女。その後方で少女の方をじっと見ているハゲワシ。「ハゲワシと少女」と題された写真を見たことがある人は多いだろう。1993年に南アフリカの写真家ケビン・カーター氏が撮影したその一枚、僕は大学1年生のときに見た。内戦の災禍がもたらす過酷な現実、子どもたちを苦しめる飢餓。衝撃を受けた。もしあんな決定的瞬間を目の当たりにしたら、写真家は撮るべきなのか、救うべきなのか。自分ごとのように考えた。国際協力や人道支援に携わる人たちも、あの写真に心揺さぶられた経験があるのではないか。写真で知った以上、起きている悲劇を知らなかったとは言えなくなる。でも、いったい何ができるといえるのか。答えは出ない。それでも、なんとかしなければと前に踏み出す人がいるのだ。

そんな一歩を駆り立てる写真を撮りたいと願い、写真家を続けてきた。アフリカにはかれこれ30回は通っている。「ハゲワシと少女」が撮られた南スーダンには2013年に訪れた。スーダンから独立して間もない頃だ。ようやく自分たちの国を持ち、コミュニティを立て直そうと奮闘する人びとの姿を撮影した。あの少女が生きていたら25歳くらいのはずと思いき、どこかで出会わないかと彼女の姿を探したものだ。その年の暮れ、南スーダンは内戦状態に陥った。17年には一部地域で飢饉が発生して極限の飢えがふたたび人びとを追い詰め、400万人もの難民が周辺国で避難生活を強いられていた。その現状を受けてウガンダ、エチオピア、ケニアを訪れ、南スーダンとの国境近くにある難民キャンプを撮影して回った。今回のケニアで暮らす難民の写真は、世界がコロナ禍に見舞われる直前、国連UNHCR協会の協力で撮影したもの。写真では現実を変えられないと

心が空っぽになることもある。それでも、なぜ変えなければならぬかという問いを投げかけることはできる。その「なぜ」が写真を見る人の内なる境界線を押し広げ、世界が自分以外のたくさんの人の「生きていく」という思いでできていることを想像する手がかりになればと願う。それが、僕が写真を撮るときに思うことだ。



ケニア

国名：ケニア共和国
 通貨：ケニア・シリング
 人口：5,257万人
 (2019年、国連)
 公用語：スワヒリ語、英語



酷暑を避けて早朝に陸上の練習に励む難民たち。



土壁に草葺き屋根の伝統的な住居「トゥクル」。



水くみに向かう南スーダン難民の女性たち。

渋谷敦志 (しぶや・あつし)

1975年、大阪生まれ。立命館大学産業社会学部、英国London College of Printing 卒業。高校生のときに一瀬泰造の本に出会い、報道写真家を志す。大学在学中に1年間、ブラジルの法律事務所働きながら本格的に写真を撮り始める。大学卒業直後、ホームレス問題を取材したルポで国境なき医師団主催1999年MSFフォトジャーナリスト賞を受賞。著書『今日という日を摘み取れ』(サウダージ・ブックス)、『まなざしが出会う場所へ―越境する写真家として生きる』(新泉社)など多数。JPS展金賞、視点賞などを受賞。



トムさんは「ポジティブ」な気持ちをつねに持つ。



陸上選手の姉を持つ難民のトムさん(左端)と家族。

People's Republic of Bangladesh

[バングラデシュ人民共和国] 写真・文・吉田亮人

彼の人生、彼の夢



ダッカの街を走る路線バスの車掌として働くリアジ君。客の呼び込み中は、排気ガスや巻き上がる埃を吸い込むことになる。

彼の人生、彼の夢 (2019年7月号掲載)

バングラデシュの首都ダッカで路線バスの車掌として働く少年、ムハンマド・リアジ君。朝4時に起き、6時から仕事が始まる。往復3時間の路線を一日に4~5往復しながら、乗客を呼び込み、乗せ、運賃を徴収していく。仕事が終わるのは22時ごろだ。よりよい生活を求めて地方からダッカに出てきたリアジ君の一家だが、父親の稼ぎだけでは生活が苦しく、リアジ君は学校をやめて働くことにした。そのおかげで妹は学校へ通えている。そんなリアジ君の一日を追い、夢を聞いた。

2019年7月号は
こちらから





22時ごろ、ようやくバスは駐車場に戻る。最後に車内の清掃をして一日の業務が終わる。



夜になっても交通量の多い都心部。リアジ君は交代なしで一日中働き続ける。



昼食は呼び込みの合間に手早く片手で済ませる。



多くの車と人が行き交う路上で、バスの行き先を大声で案内し、一人でも多くの客を呼び込む。



リアジ君は毎朝4時に起床している。バスの駐車場から始発の停留所まで移動するわずかな時間にも車内で横になる。



日本の4割程度の国土に1億6,000万人以上が暮らす、人口密度の高いバングラデシュ。ダッカの街は人いざれに満ちている。

JICAの取り組み

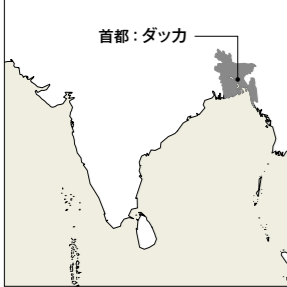
最貧国でありながら年率6パーセントの経済成長を続け、投資先・市場としても注目されるバングラデシュ。JICAは、さらなる経済成長のために必要なインフラ支援や産業の成長、また人々の生活を向上させる保健医療や災害対策などで協力している。

経済格差が激しく、セーフティネットも脆弱な同国で、貧困家庭に生まれた子どもたちは生き残るために働かなければならないのが現実なのである。そんな子どもたちが100万人はいるといわれている。未来のバングラデシュを担う若い力が貧しさの中に閉じ込められ続けるのは、社会全体にとっても大きな損失である。

「未来はバス会社のオーナーになつて家族を楽させてあげたい」リアジ君の小さな願いに、対して写真でできることは少ないかもしれないが、社会の関心に向けて、問題意識の萌芽を促すことはできるかもしれないと思い、一昨年からは同国である展示プロジェクトを始めた。少しでも子どもが子どもでいられる時間をつくるために、写真家としてできることを考えていきたい。



乗客から運賃を集めて回るのもリアジ君の仕事だ。彼は誰がどこから乗ったかをすべて記憶している。



首都：ダッカ

バングラデシュ

国名：バングラデシュ人民共和国

通貨：タカ

人口：1億6,555万人
(バングラデシュ統計局、2019年)

公用語：ベンガル語(国語)

「将来はバス会社のオーナーになつて家族を楽させてあげたい」リアジ君の小さな願いに、対して写真でできることは少ないかもしれないが、社会の関心に向けて、問題意識の萌芽を促すことはできるかもしれないと思い、一昨年からは同国である展示プロジェクトを始めた。少しでも子どもが子どもでいられる時間をつくるために、写真家としてできることを考えていきたい。



写真が貼られたバスの前に立つリアジ君。プロジェクト後、車中で彼を「リアジ」と呼ぶ乗客が出てきた。それまでは「おい、お前」と呼ばれていたのが、名前のある存在となった。



一連の撮影後、リアジ君の写真のバスに貼り付けて走らせる「Return Project」を現地で行った。「写真を現場に還す」ためのプロジェクトだ。

排気ガスと埃まみれの空気、強烈な太陽光、古びたコンクリートビル群、気が遠くなりそうなほどやかましいクラクションと車のエンジン音、どこからともなく漂ってくるドブの臭いと目が回りそうなくらい大勢の人間が放つ体臭。そんなものが全部かき混ぜられて巨大なエネルギーを形成しているのがバングラデシュの首都ダッカだ。そこで生きる人々の生の強さに惹かれてこれまで同国を何度訪れ撮影を続けてきた。被写体は、働く人々。さまざまな労働者の働く現場を写真に収めるため、ダッカ市内のあちこちを訪ね回っていたのだが、その際交通手段としてよく利用していたのが市民の足となっている路線バスだった。乗車するほどのバスにもドライバーのほかに、切符をもぎつたり客を呼び込んだりする車掌が働いている。そのほとんどはまだ年端もいかない少年だった。何人もの少年たちを見るにつけ、彼らがどんな生活を送り、どんな人生を歩んでいるのか気になり始めた僕は、思い切って一人の少年に声をかけ、写真を撮らせてもらえないかと頼んでみた。それが当時15歳のムハンマド・リアジ君だった。爪を噛みながら「いいよ」と興味なさそうに答えてくれた彼をその後3年間にわたって追い続けた。通常ならば学校に通って勉強し、友達と遊んでかけがえのない青春時代を送っているはずだが、それはほど遠い生活を送っていたリアジ君。僅かな賃金を得るために早朝から深夜まで働きに働くのは、言うまでもなく貧しい家族を支えるためだ。経済格差が激しく、セーフティネットも脆弱な同国で、貧困家庭に生まれた子どもたちは生き残るために働かなければならないのが現実なのである。そんな子どもたちが100万人はいるといわれている。未来のバングラデシュを担う若い力が貧しさの中に閉じ込められ続けるのは、社会全体にとっても大きな損失である。

吉田亮人(よしだ・あきひと)

1980年、宮崎県生まれ。小学校教員として6年間勤務後、2010年より写真家として活動を開始。写真集に『THE ABSENCE OF TWO』(2019年、青幻舎)などがある。ウェブサイトhttp://www.akihito-yoshida.com





とよさき
デコート・豊崎・アリサ

ジャーナリスト、写真家、監督、遊牧民のトゥアレグ族を支援する団体「サハラ・エリキ」代表。父はフランス人、母は日本人。サハラ砂漠を4か月かけて横断する塩キャラバンの日常を追った映画「Caravan to the future」発表。塩キャラバンや福島原発事故、ニジェールのウラン鉱山について執筆中。

自然の恵みを借り、伝統的な知恵を生かしていた昔の世界は、とても生き生きしていた気がする。塩キャラバンに同行したとき、その生命力に圧倒された。彼らは失われつつある世界の最後の証言者、生き残りだ。砂漠を何時間もラクダで横断したあとに、焚き火の周りでお茶を飲みご飯を食べた満足感忘れられない。いい人生とは快適さではなく、自分の力で懸命に生きのびることなのだを彼らを撮影して感じた。



みちしろまさひろ
道城征央

小笠原や沖縄、ミクロネシア方面へ年間に何度も旅することから「南海の放浪カメラマン」の異名を持つ。「人と自然との関わり方」をテーマに幅広い講演活動を行う。また、埼玉動物海洋専門学校において「自然環境保全論」「海洋環境学」の特任講師を務めている。

ミクロネシア連邦を通して私の途上国へのイメージは大きく変わり、手つかずの自然の美しさや現地の空気にはまってしまい、今では現地の人々とともに清掃活動などを通じて環境問題にも取り込んでいる。世界の中心は政治や経済の力だけで決まらない。地球は球体で、その中心は人それぞれ、どこにあってもいい。私にとっての中心であるミクロネシアから、今私たちが忘れていたことを、写真を通して発信していきたい。



あべゆうすけ
阿部雄介

岐阜県生まれ。機内誌をはじめ、さまざまな媒体で活動。世界の熱帯雨林や野生動物などの撮影をライフワークとし、ボルネオには30回以上通っている。2009年にマレーシア・サバ州観光省主催の「サバ・ツーリズムアワード」にて、海外記事部門最優秀賞を受賞。

世界は広く、美しいものや驚くべきものがたくさんある。写真は美しい瞬間を永久的にとどめ、言葉を越えて直感的にたくさんの情報や感動を伝えられる手段だ。生き物が持つ美しさをありのままに伝えたい。一方で、私たちが豊かな暮らしを追求した結果、遠く離れた地の自然環境を破壊しているという現状に気づいてほしい。ボルネオの熱帯雨林のような素晴らしい生命の森が、いつまでも地球上に残ってほしいと願う。



おかもと さな
岡本 央

宮城県生まれ。写真家。「自然と風土に遊び学び、働く」、世界の子供たちや日本の子ども「郷土」をライフワークとして撮り続けている。著書に「ブータン 幸せの国の子どもたち」(共著・東京書籍)、『泥んこ、危険も生きる力に ないないづくの里山学校』(家の光協会)ほか。

私の撮影テーマは「農村と子ども」だ。農村を見ずしてその国は語れない、農村の子どもたちの姿こそが国の将来を物語っていると思うからだ。都会の子どもたちの教育環境や衛生事情との格差にときに言葉を失うが、先進国が失いがちな生きるための活力や強い家族愛などを感じることも多い。紛争や貧困などの負の面だけでなく、家族愛、人間愛を原動力に将来への夢を失わない、人々の優しさや強さも伝える写真を撮影していきたい。

「地球ギャラリー」の特設サイトがオープン!

写真で旅する世界

～ファインダー越しの途上国～



まつお じゅん
松尾 純

広島県生まれ。19歳の頃から一眼レフを持って世界を旅する。50以上の国と地域での撮影経験を持ち、世界各地の辺境で暮らす人々を写し続ける。最も得意なフィールドはチベット文化圏。近年は広島を拠点に本や雑誌への執筆、取材撮影、講師、写真展などで活動中。

被写体のことをもっと知りたいうえで、背景にあるものを理解したうえで写真を撮りたいと思う。旅人として通り過ぎるだけでは気づけなかった多くのことを、写真を通じて知った。価値観は人それぞれで、幸せの概念も同じではない。一方で、親から子どもへの思いのようにどんな世界にも共通するものもある。モンゴルの鷹匠一家の少年は私の息子と同年で、3歳から知っている。私にとって彼らは家族だ。早く戻れるときがきますように。

これまでに掲載した記事を
特設サイトで公開

JICA広報誌「mundi」の連載コーナー「地球ギャラリー」は2008年10月に始まり、これまで12年間にわたって新進気鋭の写真家やベテランフォトジャーナリストらとらえた“途上国の今”を、写真と文章で紹介してきた。各国が抱える課題やありのままの人々の営みをさまざまな切り口で映し出す記事には読者からも多くの反響があり、今年1月、JICA公式ウェブサイト上に「mundi 地球ギャラリー」の特設サイトをオープンした。

サイト内では過去に「mundi」誌面に掲載された記事を、まさしく「ギャラリー」をめぐるように、より写真を楽しめる形で公開している。また、写真家の清水匡さんと桜木奈央子さんの特別インタビュー動画や、二人が登場した「EARTH CAMP」*1のオンライントークイベントの動画も公開中*2だ。

特設サイトでは、3月末までに10本の記事と、動画を公開していく予定だ。このページでは5人の写真家の作品の一部と、一人ひとりがどのような思いでファインダーをのぞいてきたのかを紹介する。

*1 毎年開催している国際協力キャンペーン(詳細はp.34~35を参照)。
*2 当日の詳しい様子や動画はp.24~25を参照。

サイトはこちら▶



私たちが聞きました



mundi特別企画

中高生の私たちから質問です!

イベント終了後にオンラインでつなぎ、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2020」で最優秀賞を受賞したふたりからイベント登壇者に聞きたいことを自由に質問してもらった。

私立玉川聖学院高等部3年
藤林彩乃

(ふじばやし・あやの)さん

「将来的に区議会議員になり、課題を挙げて世の中に訴えたいと思っています。みなさんとお話ししてさらにその気持ちが強くなりました」

Question
藤林さん

私は今回、「世界の生理事情」をテーマにエッセイを書きました。そこにもつながるのですが、私は将来的に保健体育の授業を男女共同にするべきだと思っています。男性と女性で分けて教育を受けることで生理のことをタブー視されてしまったり、間違った知識を植えつけてしまったりする可能性があると思うからです。その点について男性からの意見をお聞きしたいです。

Answer: 昇吉さん

これは、タブー視されている雰囲気改善によって社会的な不合理を解消していこうという話ですね。そのためには授業と一緒に受けるだけでなく、もっと話し合うなどおたがいの理解を深めていく機会を増やすことが大切かもしれません。

Answer: 清水さん

賛成です。女性について理解を深めることにつながるので、子どもの頃から男性の女性に対する思いやりが育つと思います。男性側の恥ずかしさがなくなるとおたがいの関係性もどんどんよくなるのではないかと思います。

名古屋市立汐路中学校3年
大石 理紗子

(おおいし・りさこ)さん

「みなさんの話を聞いて小さな力の積み重ねが大切だと気づきました。自分のできることから小さな発信を続けていきたいと強く思っています」

Question
大石さん

私は支援活動として日本で募金やエコキャップ運動ぐらいしかできていないのですが、途上国の人のために日本でできることはほかに何かありますか？

Answer: ヤマザキさん

なんでもできると思います。ただ、海外ばかりに目を向けるのではなく、まずは日本で助けを必要としている周りの人たちに対してどういう手を差し伸べることができるのかを考えるのがいいのかなと思います。そうして考え、行動していくことが次第に海外の人にとっても役立つことにつながっていくのかなと思います。

Answer: 桜木さん

大石さんの話を聞いて自分の10代の頃を思い出しました。私も自分に何ができるんだろうと考えていた時期があったんですね。まずは、国や地域の人たちのことを知ること。それが相手にとって何が必要なかを知ることにつながります。そのうえで、自分が等身大で無理せずにできることを探してみるのがいちばんシンプルな手順だと思います。

Answer: 昇吉さん

広い世界の中で自分は小さなことしかできないと思わないで、小さなことでも恥ずかしがったり、気負ったりせずにやり続けていくことが大切だと思います。大石さんがいま行っていることが習慣になれば、さらに意識が変わっていくと思いますよ。

Answer: 清水さん

募金など大石さんはすでに周りの人を巻き込み、大きなことに取り組んでいます。問題を知ること、伝えることが大切で、そして発信していくことで、大人や力のある人たちが助けてくれることがあります。続けていくことが大きな力になると思います。



「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」イベントレポート

一枚の写真が開く世界の扉

オンラインの国際協力キャンペーン「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」のメインイベントで、本誌企画「地球ギャラリー」から生まれたトークイベントが開催された。

文●坪根育美 写真●小島 沙緒理

春風亭 昇吉(しゅんぷうていしやうきち)さん

落語家。岡山県出身。2007年に東京大学経済学部を卒業後、春風亭昇太に入門。落語での活動のほか、経済番組のMCやバラエティ番組への出演、また気象予報士としてもテレビなどで幅広く活躍中。21年5月、真打に昇進する。

ヤマザキマリさん

漫画家・文筆家。p.03を参照。

桜木 奈央子(さくらぎ・なおこ)さん

写真家。p.09を参照。

清水 匡(しみず・きょう)さん

NGO国境なき子どもたち職員兼人道写真家。p.12を参照。



トークイベントの様子は
こちらから視聴できます!
(2022年1月末まで公開予定)



写真から背景を知る

JICA、外務省、国際協力NGOセンター(JANIC)の共催によるオンラインの国際協力キャンペーン「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」のメインイベントが

2021年1月30日と31日に開催された。国際協力の日である昨年10月6日から始まったEARTH CAMPは21年3月末までの予定で、コロナ禍下においても「世界はつながっている」というメッセージを、国際協力・交流に関するオンラインイベントなどを通じて発信している。

31日には、「地球ギャラリー」でも作品を掲載している写真家の桜木奈央子さんと清水匡さん、ふたりと同様に国内外で思いを伝える仕事をしている漫画家のヤマザキマリさんをゲストに迎え、落語家の春風亭昇吉さんが司会進行を務めた「地球ギャラリー」写真で旅する世界「フライング」越しの途上国」と題したトークイベントが開催された。「表現者」という共通点がある4人。今回のイベントは、桜木さんと清水さんがそれぞれ活動している地域の様子についての話をはじめ、ヤマザキさんの海外生活での経験や知見、洞察に基づき至言が満載の内容となった。



発信し続ける大切さ

2005年、大地震に襲われたパキスタンの子どもたちが青空教室で勉強している様子や、再建された校舎で学ぶ様子を切り取った清水さんの写真紹介の際は、昇吉さんから「地震から15年が経っても多くの学校の再建が進んでいないのはどうしてなんだろうか」という質問が出た。「理由をよく聞かれるのですが、なぜと考えていても先に進まないと思うんです。目の前に子どもたちがいて、校舎を必要としている事実がある。僕たちはそれを解決するために活動しているだけなんです」と清水さん。この言葉を受けて「原因にたどり着けないこともあるんですよ。私たちには見えない、計り知れないような事情が後ろで動いている場合もありますから、それをどうしようと考えようより、先にとり進んでいかなければいけないこともあります」と、ヤマザキさんはまず行動することの大切さを説いた。



トークは「ウガンダは第二の故郷」と話す桜木さんの写真紹介からスタート。桜木さんは、内戦からの復興の過程を見てきた同国について話をしながら「12年越しの結婚式」と名づけた写真について「結婚式で集まったみんなが平和っていいねと言っていました。平和というものは戦争を体験していない人にとってはあたりまえでふだん意識しませんが、こういう写真や写真の背景にある状況を知ること、平和はあたりまえでないと意識することを感じてもらえたらうれしいです」と、そこに込めた願いを伝えた。またパキスタンなどの国で撮影を続けている清水さんは、「抱える背景は想像できないくらいいろいろなものがあるが、実際に接してみると子どもたちは笑ったり、がんばっている姿を見せたりしてくれる。それを見ると子どもらしさに国境はないな、みんな同じなんだと感じます」と、これまでに会って来た子どもたちの印象について教えてくれた。



さらに話は、パキスタンの女性の就学率の低さから世界のジェンダー格差の問題の話へ。ヤマザキさんは、「イスラム諸国やアフリカでは顕著な問題です。結婚が就職ととらえられていて、実はわれわれ日本人も昭和初期ぐらいまではそうだった。時間とともに新しい思想が入っていくなかで少しずつ改善されていくんです。私たちも感じたことをたくさん発言する場をたくさん持つことが少なからず(問題解決に)効果をもたらすのではないかと思います」と話した。速い国のことであっても、写真だから伝えられることがある。「一枚の写真を通してほかの誰かの存在を知り、人と出会う喜びを再認識できる力が写真にはあると思っています」と桜木さん。スマートフォンでの撮影など身近にもある写真が持つ力についてあらためて気づき、途上国が抱える課題だけでなく、希望も感じることができた時間となった。

世界の課題 表現してみよう!

【高校生の部】最優秀賞 独立行政法人国際協力機構理事長賞

私たち女の子には1か月に一度、憂うつな日があります。それは生理です。突然始まってしまった時にナプキンを持っていなかったら、友達にもらったり、お店で買わなければなりません。日本では質の良いナプキンが低価格ですぐに手に入り、学校や仕事に行くこともできます。では外国はどうなのでしょう。私は昨年、インドから来日した留学生と友達になりました。二人で一緒にお茶を飲んでいたら、彼女が生理になってしまったのです。私は持っていたナプキンを渡しました。処置が終わって戻ってきた彼女は、そのナプキンの質の良さに感動し、インドの生理事情について話してくれました。インドのある地方では宗教上、生理中の女性は汚れたものとされていて、台所で料理をすることも家の中で寝ることも許されずベランダで寝るとのこと。また多くのインドの女性たちはナプキンが高額のため、購入できません。お米が1キロ31円に対し、ナプキン20個入りが217円。だから不衛生な古い布をナプキン代わりにして処置するため、子宮の病気や感染症で苦しんでいるのだそうです。

2015年9月、国連総会で2030年までに達成すべき17の持続可能な開発目標SDGsが採択されました。その中には全ての人に健康と福祉を——世界の妊産婦の死亡率を10万人あたり70人未満に減らすとゴール3に記されています。しかし現在、開発途上国の妊産婦死亡率は依然として先進国の14倍にのぼります。それはおそらく医療の発展の遅れに加え、生理中の不衛生による子宮環境の悪化が強く影響しているのです。生理現象は誰にでも起こるにもかかわらず、生まれた国によって格差があるということを知りました。ある日は通学路で布ナプキンの専門店を見つけた。布ナプキンは繰り返し洗って使えるため衛生的です。日本全国に約12歳〜50歳の人口は約2840万人。一人あたりのナプキンの年間使用枚数を240個とすると、日本では68億個のナプキンが使用されることになり、もしも使い捨てナプキンを皆が使ったとすれば、年間5万5000トンのゴミが出る計算です。しかも使い捨てナプキンの主な素材は石油由来のものから作られているため、使い捨てると地球の沢山の資源を使って捨てられていることになるのです。もちろんゴミを焼却する際にも多くのエネルギーを使います。繰り返し使える布ナプキンは地球の貴重な資源を大切に使うことにも繋がります。でも2030年まで、あとたった10年しかありません。今こそSDGsの達成に向けて私たち高校生も行動する時が来たのです。私の通っている高校では、この9月に家庭科の授業で生理用布ナプキンを作るのになっていました。私の学年は約2000人在籍しているため、少なくとも200枚の布ナプキンが完成することになります。それを国連と連携を図り開発途上国に送りたいのです。文化によって男性に生理のことを言えない

世界の生理事情から考えるSDGsの達成とは

私立玉川聖学院高等部3年 藤林彩乃(ふじばやし・あやの)さん

【中学生の部】最優秀賞 独立行政法人国際協力機構理事長賞

「輝く世界のために」
名古屋市立汐路中学校3年 大石理紗子(おおいし・りさこ)さん

フィリピンの高校生の「輝く」眼差しが私を変えた。
私は名古屋Y.M.C.A.で、フィリピン・イロイロ市タンバリザ村の映像を見た。「フィリピンでは1年間大学に通うのに5万5000円程度かかる。しかし奨学金制度を利用して大学に通っている学生は、奨学金制度により自分の夢に向かって勉強できることをとても感謝しながら楽しんでる。輝いた目をした彼らの写真と共にその事実は私の心を揺さぶった。私はどうだろう。当たり前のように学校に行き、当たり前のように高校や大学進学を考えている。そのことが

当たり前ではなく、恵まれたことだと意識していただろうか。なんだか恥ずかしくなってきた。同じ学生として何か自分にもできることはないだろうか。
私は幼少期から名古屋Y.M.C.A.の募金活動に参加していたが、ただなんとなく参加していたそれまでとは違う意識で、タンバリザ村の高校生の大学支援やその他の募金活動に参加するようになった。すると、自分のひとつひとつの呼びかけにより気持ちも大きくなり、呼びかけていた誰よりも大きな声で明るく呼びかけていた。募金活動を通し、様々な現実、そしてその力になることに関心を持つこと、持つてもらうことが大切だと痛感した。この経験をきっかけに、生徒会長でもあった私は、中学校で毎年行われる募金活動を、従来の生徒会執行部のみで行うのではなく、全校生徒が誰でも参加できるボランティア型の募金活動とする発案をした。まずは「何かの力になれること」に関心を持って貰うためだ。すると予想外の数の生徒達が参加してくれた。参加してくれた友人達には、「自分が募金を呼びかける立場にたつと、より

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

JICAでは中学生・高校生を対象に、国際協力のあり方や、国際理解をテーマとした「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」を毎年実施している。2020年度の募集テーマは「世界とつながる自分」私たちが考えること、できること。中学生の部(応募数1万6956点)、高校生の部(応募数2万2762点)で、それぞれ最優秀賞・独立行政法人国際協力機構理事長賞を受賞した。エッセイ全文と受賞者の喜びの声を紹介する。

関心を持つことができるし気持ちも違う。また何か機会があれば参加したい」と声をかけられた。私は嬉しかった。そして自分から小さな発信をすることが大事だと気づききっかけになった。
国際協力と聞くと、とても大きなことをするように思える。だが、まだ中学生の私が日本にいてできることは本当に小さい。しかし見方を変えれば、身近にきっかけを作る機会はあると思う。私はこれからはできる限りのボランティアと小さな発信を続けていく。その上で大切にしたいことがある。それは現地の人の視点で考え、相手を尊重することだ。これはJICA海外協力隊としてジンバブエで活動された、中学1年の時の担任の先生から教えて頂いたことだ。相手の気持ちになって自分が力になりたいという思いやりの心が繋がっていくことで、世界中に笑顔になる人が少しでも増えてほしい。あの日見たフィリピンの子の目の輝きを胸に、両親や周りの人達に感謝しながら世界と繋がっていききたい。

視野が広がりました



素晴らしい賞をいただき、本当にうれしいです。書くときには自分が経験したことをそのまま、飾らずに伝えることを心がけました。今回の応募で、自分自身の視野も広がりました。将来は医師になりたいと思っていますが、世界で活躍できる職にも就きたいと考えるようになりました。世界で活躍する医師もいますし、ほかにもいろいろ探してみたいです。世界の問題に関心を持ってもらえるように、自分ができることを続けていきます。

声を上げることが大切



生理について語ることはまだタブー視されている面もあり、今どんな問題があるのか、男性も含めて多くの人に知ってもらいたいと応募しました。その内容が評価されたことがうれしいです。私自身、社会に出るときには生理休暇をきちんととれるところで働きたいと考えています。私は大学に進学しますが、リクルートスーツの多様化にも取り組みたいです。SDGs達成への道と同じで、声を上げていくことで社会が変わっていくのだと思います。

【寄稿】

エッセイコンテストに
応募した私たちは
今、こんな道を歩んでいます

1962年に「海外移住奨励賞」という名前でスタートしたエッセイコンテスト。その後、90年に現在の名称となった。過去の受賞者は今、どんな道を歩んでいるのか、お二人に寄稿いただいた。

大石しおりさん

1998年(中学生の部)審査員特別賞受賞
受賞エッセイ「返ってきたエッセイ」
(熊本市立帯山中学校2年在籍時)
2001年(高校生の部)準特選受賞
受賞エッセイ「スタートは歩み寄り」
(熊本県立熊本高等学校2年在籍時)



PROFILE
一橋大学で社会学を専攻。現在は非営利団体(教育NPO)のファンドレイジング部門でCRM業務を担当。寄付という善意のお金が動くことで、子どもたちの未来に希望が生まれ、社会により循環が生まれることを感じながら日々仕事をしている。

立ち止まって想像してみることを

異文化とは何でしょうか。中・高生の頃の私にとって、異文化とは国家を超えた土地に根差した誰かの日常でした。わくわくする出会いや新しい発見です。大人になってから、異文化はすぐそばにあることに気づきました。油断すると見過ごしてしまったり、つい一部分を切り取って自分の理解に組み込んでしまうこともあります。
中・高生の頃、海外の旅先で出会った人と同じ景色を見て同じ気持ちになっ

たり笑いあったりしたものです。それは、自分が日常だと思っていることの意味を問い、相手と私が大切にしたい価値に気づくことでした。当時をふり返り、今あらためて自分と立場の違う人の気持ちを想像してみることが大切にしたかったと思っています。

藤目琴実さん

2001年(高校生の部)審査員特別賞受賞
受賞エッセイ「心の地球儀」
(愛知県立時習館高等学校2年在籍時)



PROFILE
NHK報道局ネットワーク報道部記者。取材のほか公式SNSの「中の人」として生活防災ツイッター(@nhk_seikatsu)やLINEアカウントを担当。大学時代はフィールドワークに明け暮れる。育休中の現在は夫の赴任地である中国・広州で1歳の息子の子育てに奮闘中。

モヤモヤを原動力に

当時の私は「国際」という言葉に漠然とした憧れを抱く高校生でした。期待とともに留学したマレーシアで民族間の軋轢や格差を目の当たりにして戸惑ったことを覚えています。

その頃は「モヤモヤする……」としか表現できなかった複雑な感情の正体を突き止めたいと、大学ではアジアの社会開発を学び、現地調査に通い詰めました。記者となつて10年あまりが経つても、モヤモヤは世の中への違和感や問題意識は取材の強い原動力です。遠い世界の出来事をどうやってリアルに感じてもらうか、伝える仕事の難しさを痛感しつつ模索を続けています。



ビデオブログコンテスト

テーマは、フィリピンにおいて日本やJICAの存在が人生に与えたこと。応募資格は18~24歳のフィリピン人で、大賞受賞者の副賞は日本への研修旅行。「COVID-19の影響が落ち着き、日本のJICAの“現場”を訪れることができたときには、その体験もビデオブログにしておこうと考えています」とバカニさんは話す。

受賞 サイクリング

作：ビクター・カリオナ・ジュニア



comment
自転車に乗れば、みんなCOVID-19の感染拡大に対抗できるし、よりシンプルな世界に戻ることができる。自転車は、筋肉も体幹も強くする。感染のリスクを軽減させるためにも自転車に乗ろう!

JICAフィリピン事務所のコメント

フィリピンの平和を脅かした2017年のマラウイ危機。その現場からの映像を若者が撮り、日本の文化である千羽鶴に思いをのせて平和を祈るストーリーに胸を打たれました。

アバター／デジタル漫画コンテスト

COVID-19の感染拡大に対して、世界をよりよく変える方法をテーマに作品を募集した。

平均年齢がおよそ24歳と、若い国、フィリピン。世界のSNSの首都と呼ばれる、ソーシャルネットワークワーキングサービス(SNS)やオンラインサービスを活用する人が多い。とくに若い世代は、自在にSNSを使いこなしている。情報があふれる中、その世代へJICAの活動を伝えるために、JICAフィリピン事務所は従来の広報を超えたアプローチを検討。若者を対象にビデオブログコンテストを開催した。「ユーチューブへの動画投稿などが身近なおもしろい表現が出てくると期待しました」とフィリピン事務所のアマンダ・バカニさんは話す。

周囲からの反応もよく、「コンテストの第2弾はあるの?」と尋ねる人も。日本やJICAへの関心が高まったと感じています

JICAフィリピン事務所
アマンダ・バカニさん

多くの人が幼い頃から慣れ親しみ、読んできた「漫画」。日本を代表する文化でもある。そこで、途上国が抱える課題を漫画でわかりやすく、多くの人に伝えられたいか、との思いから始まったのが漫画コンペ「国際協力まんが大賞」だ。SNS時代の漫画とその作者をサポートする企業コミチとJICAのコラボ企画で、3月8日の国際女性デーおよび12月3日の国際障害者デーに向けて、その背景にある課題をテーマに、エピソードに基づいた作品を募集した。応募総数は、両部門あわせて37点。JICAの担当者は、「当初、途上国を舞台にした漫画は描きにくいのではと心配しました。しかし、みなさんとても丁寧に描写してくださり、受賞作を選ぶのが難しかったです」と、作品の完成度の高さに驚く。漫画家からは「描いていて楽しかった」「少しでも多くの人に伝われば」との声が聞かれた。「私たちがコンテストに込めた思いを漫画家のみなさんが受け止めてくださいました」と担当者は喜びを語った。

大賞
JICA：私の千羽鶴への答え
作：シャネファメル・P・アルマザン、プリンス・ロイド・C・ベソリオ
(ミンダナオ州立大学-イリガン・インスティテュート・オブ・テクノロジー)

comment

願いを込めて折る象徴である千羽鶴。政府軍と過激派組織の戦闘から内戦状態になったミンダナオの地方都市マラウイ。マラウイ危機と呼ばれるこの現場で、子どもの頃に願っていた平和に、JICAと日本は一つの答えを示してくれました。まだ完全なる平和とはいえませんが、JICAはマラウイだけでなく、宗教による分断を再構築するために協力してくれました。

ビデオブログコンテスト アバター／デジタル漫画コンテスト

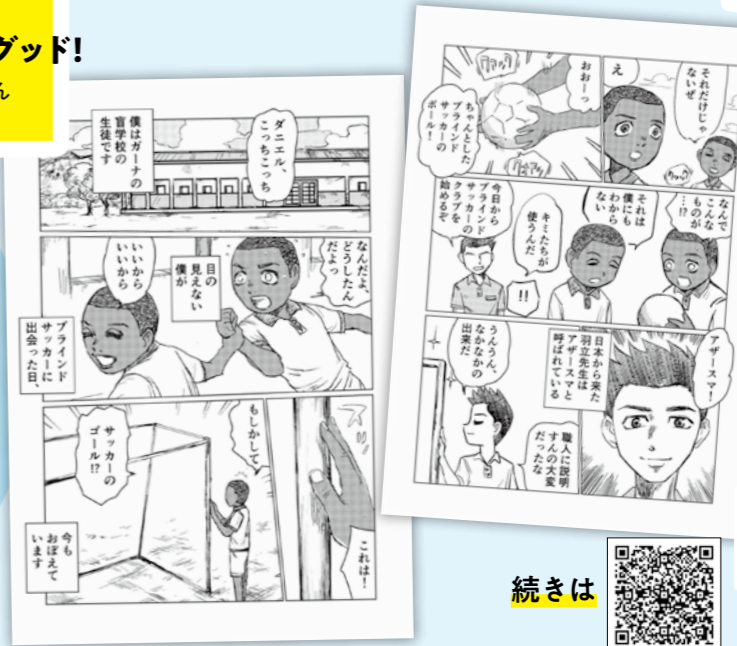
フィリピンの人々、とくに若い世代にJICAの取り組みを知ってほしい。そう考えたJICAフィリピン事務所が仕掛けたのは、ソーシャルメディアを活用したコンテストだった。



大賞
エブリシングイズグッド!
作：いぬパパさん

国際障害者デー部門

JICAの広島県国際協力推進員として活動する羽立大介(はだて・だいすけ)さんが、青年海外協力隊 障害児・者支援隊員としてガーナの盲学校に赴任したときのエピソードを漫画化。障害の有無にかかわらず参加できるブラインドサッカークラブを立ち上げ、スポーツを通して子どもたちや地域の人々が変わっていった。



続きは



大賞
ペマの後に、続く者
作：伊吹天花
(いぶき・てんか)さん

国際女性デー部門

2015年にネパールで発生した大地震後、住宅復興に向けてJICAが協力した熟練石工を育成する訓練に参加し、実際に業務に従事した女性、ペマさんのエピソードを漫画化。女性が社会で働くことに偏見があるネパールで、ペマさんの熱意が周囲を変えていく様子が描かれた。



続きは



漫画は、言葉だけでは伝わりにくいものを表現する強い力がありますし、読んでもらいやすいという利点があります。今回のコンテストは、応募くださった漫画家も、そのファンの方々も興味を持ってくださいました。そういった意味でも大きな意義があったと感じています

コミチ代表
萬田大作(まん・だいさく)さん

国際協力まんが大賞

途上国の障害者や女性が輝くストーリーの漫画コンテストが、2020年に開催された。

東ティモール事務所からひとこと

東ティモール国内の観光地や伝統工芸、文化的イベントを紹介する冊子や映像は少なく、また技術を持つスタッフも限られています。写真の撮影方法や、カメラ操作に関する指導を通じてスタッフの能力向上を図りたいとの声があり、今回の要請につながりました。前さんは、その熱心さから配属先のみなさんにたいへん頼りにされていました。



企画調査員* (ボランティア事業)
高久 将一 (たかくま かずかず)

* 隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を担う。

+one information

とりこになったアイマナス

東ティモールの大衆食堂はどこもメニューがだいたい同じで、味つけもほとんど差がありません。そんななか、店でいちばん個性を發揮するのが唐辛子を使った調味料「アイマナス」です。もともと辛い物が好きな私は、赴任してからすぐとりこになりました。アイマナスは「唐辛子」という意味を持つ現地の言葉ですが、この調味料のことを東ティモールの人はアイマナスと呼んでいます。

食堂では主食となるご飯、ボリューム満点の肉か魚のメイン、濃いめの味つけがされた野菜の副菜が一皿に盛られた料理を食べることが多く、これにアイマナスをつけて食べます。ほかにも蒸かしたサツマイモやバナナの天ぷらといった甘いものをはじめ、現地の人は本当に何にでもつけて食べるのです。

最大の魅力は、店ごとに味つけが違うところです。甘辛いケチャップのようなもの、塩辛い小魚入りのもの、唐辛子だけの激辛のもの、ほぼレモン汁のような酸っぱくて辛いものなど驚くほど違いがあります。私はこれらをひとくくりにしてアイマナスと呼ぶティモール人のおおらかさが好きです。

知れば知るほど奥が深いアイマナス。私は好みのアイマナスを置く食堂探しが趣味になり、現地の人のように食べ物には何でもつけるようになりました。なかでもおいしかったのは、野菜がたっぷり入った同僚の手作りアイマナスです。「あなたのアイマナスがいちばん好きだ」と伝えてからは「まだ家にあるか? 新しいものを持ってこようか?」と気にかけてくれ、つねに家にストックされる状態に。今ではあの味が懐かしいです。



イラスト ● さかがわ 成美



ワークショップは週に1度開催された。カメラの台数に限りがあるため人数を絞って行われた。

カメラの構え方はばっちり!



アタウロ島の伝統工芸品である木彫り人形の展示会の様子。実際に島へ行き、制作過程を撮影した動画を同時に上映した。

見応えがあります



全国13県から県代表のダンサーを呼んだ4日間にわたるイベントを、前さんたちが企画・運営したことも。

てしまい集中力が切れてしまう人もいます。そのため、積極的にこちらから話しかけ、冗談などを交えながら楽しく学べるように心がけました。言葉では伝えきれない「伝えたいこと」を、写真を通じて表現するすばらしさが、現地で日々をともした人たちの心に少しでも届いていたらうれしいです。活動を通じて、私自身も東ティモールの伝統や工芸品の魅力を知りました。ゆくゆくは日本で販売するなど多くの人へ伝えたいと考えています。

ある教育省の芸術文化総局(以下、芸術局)に配属されました。芸術局は、同国の芸術・文化の発展を目的とした事業を行う国の機関です。同国では冊子や映像制作の技術を持つスタッフが限られていることから養成したいとの希望があり、私はここで芸術局が企画・運営する展覧会などのイベントの写真撮影を行うとともに、撮影方法を教える活動に取り組みました。なかでも、定期開催している東ティモールの伝統的な踊りや伝統工芸品に関するイベントでは、配属先の同僚を指導しながら撮影をする当日だけでなく、開催前の準備にも力を入れました。たとえば展示用のパネルや配布用のリーフレットなどに使用するための写真撮影をはじめ、イベント会場で上映する動画撮影も行いました。この動画は、教育教材として現地の小学校と中学校にも提供しました。もうひとつ大事な活動として、芸術局のスタッフに対してデジタル一眼レフカメラについてのワークショップを週に1度開催しました。まず基本的な使い方から教え、次にイベント時の写真、集合写真、三脚を使つての物撮り写真など、できるかぎり同僚の仕事で必要性の高い撮影方法を伝えるようにしました。参加者のなかには、初めは興味を持っていてもすぐに飽き



JICA海外協力隊がゆく Vol. 28

フォトグラファーとしての経験を生かし、写真を通して表現することのすばらしさを伝えた隊員を紹介します。

構成 ● 坪根育美

東ティモール 前美友己

まえ・みゆき
出身地: 和歌山県 職種: 写真
任期: 2018年10月~2020年8月(特別任期短縮)



首都: デリ
東ティモール

写真だからこそ伝えられることがあります!



前職では、卒業アルバムを制作する会社でフォトグラファーとして働き、写真撮影と編集のスキルを培いました。このときの社長がJICA海外協力隊の応募経験があり、「興味があるなら受けてみてはどうか」と勧めてくれました。さらに話を聞くうちに、写真を通じた国際協力に自分も貢献したいと思ひ応募しました。私は東ティモールの首都デリ

にある教育省の芸術文化総局(以下、芸術局)に配属されました。芸術局は、同国の芸術・文化の発展を目的とした事業を行う国の機関です。同国では冊子や映像制作の技術を持つスタッフが限られていることから養成したいとの希望があり、私はここで芸術局が企画・運営する展覧会などのイベントの写真撮影を行うとともに、撮影方法を教える活動に取り組みました。なかでも、定期開催している東ティモールの伝統的な踊りや伝統工芸品に関するイベントでは、配属先の同僚を指導しながら撮影をする当日だけでなく、開催前の準備にも力を入れました。たとえば展示用のパネルや配布用のリーフレットなどに使用するための写真撮影をはじめ、イベント会場で上映する動画撮影も行いました。この動画は、教育教材として現地の小学校と中学校にも提供しました。もうひとつ大事な活動として、芸術局のスタッフに対してデジタル一眼レフカメラについてのワークショップを週に1度開催しました。まず基本的な使い方から教え、次にイベント時の写真、集合写真、三脚を使つての物撮り写真など、できるかぎり同僚の仕事で必要性の高い撮影方法を伝えるようにしました。参加者のなかには、初めは興味を持っていてもすぐに飽き

仲間とともに 研修の成果を深める

JICAが協力を続けてきた途上国には、日本でJICAの研修を受けた帰国研修員が数多く存在する。日本で学んだことや日本の文化を母国に伝え続ける「JICA帰国研修員同窓会」が各国で組織されている。なかでもトルコでは、設立から33年にわたり活発な活動を続けている。

トルコJICA帰国研修員同窓会

2018年

初代会長
ルヒ・エシルゲンさん
旭日双光章受章
トルコJICA
帰国研修員同窓会
外務大臣表彰

2019年

2代目会長
フセイン・ヴェリオールさん
旭日中綬章受章



「日本における博物館学と文化財の保護モデル」をテーマに、同窓会が開催したセミナー。

JICAのトルコへの協力は1959年、日本での研修員の受け入れから始まった。以来、4000人以上が日本で学び、帰国後に多くの分野で活躍している。同国内で帰国研修員が増えるにつれ、「日本で学んだ研修員同士の交流を深め、日本とのつながりも維持したい」という

日本での経験をトルコで生かす

熱心な声が上がった。そこで88年、日本大使館の協力を得てJICA帰国研修員同窓会（以下、同窓会）が組織された。講演会や文化交流イベントの開催などから始まった同窓会の活動は、少しずつ広がりをみせた。「なかでも活動の中心はセミナーです」と話すのは、設立当初から同窓会に関わってきたJICAトルコ事務所員のエミン・オズダマルさんだ。「帰国研修員はさまざまな分野で



同窓会事務局のメンバーたち。彼らの熱意が、活動を支えている。

活躍していますが、日本で学んだ経験や知識をトルコの人たちに伝えることもまた彼らの果たすべき役割です」。そのために同窓会の活動はあつと、オズダマルさんは力説する。セミナーは首都のアンカラだけでなく、国内20か所以上で開催され、毎回50人から200人ほどが集まる。帰国研修員から「自分が学んできたことを伝えたい」と開催の要請が来ることもあるそうだ。

励みになるアクションプラン・コンテスト

こうした活動の積み重ねから生まれたのが、2015年から開催されている「アクションプラン・コンテスト」だ。JICAの研修では最後に、各研修員が帰国後に取り組みたいことを具体的で実現可能なアクションプランとして発表する。コンテストでは、そのプランをどう実現させたのかを発表。公益性や工夫、インパクトなどを基準に優れた取り組みが表彰される。帰国研修員の意欲を高めることが目的となっている。「水産業を盛り上げるお祭りを企画したり、女性グループでジャム作りや食品販売を行ったり……。コンテストを通していろいろな取り組みを知ることは活動の参考になりますし、がんばっている仲間の姿に刺激を受ける帰国研修員も多いです」とオズダマルさん。小学校教師のエスマ・フリエ・バルシュさんが発表した防

研修員の声

Voices

2019年 アクションプラン・コンテスト 1位! 「パズルで学ぶ防災」エスマ・フリエ・バルシュさん

トルコ北西部のバルケシル県で小学校の教師を務めるバルシュさんは、2013年に防災教育の研修で神戸などを訪れた。「ゲームや実験などを通して、楽しみながら学び、教師だけでなく消防士やボランティア、被災経験者なども関わる日本の防災教育に感銘を受けました」とバルシュさんは研修での印象を語る。帰国後は、防災教育祭を企画。そこから生まれたのが防災教育パズルだ。地震前、地震中、地震後にすべき行動についてのクイズを出題し、正解すると

パズルのピースがもらえるもので、全問正解すると防災に関連する1枚の絵が完成する。日本の経験に、バルシュさんのアイデアをプラスした取り組みが評価され、1位に輝いた。「受賞はとても驚き、幸せでした。さらに受賞によってパズルがよりよいものになって他の都市の教師や生徒に届けられたことも、とても励みになりました。私をサポートしてくれた学校やJICA、トルコ日本財団、帰国研修員同窓会に感謝します」とバルシュさんは喜びを語った。



防災教育パズルに挑戦するバルシュさんのクラスの児童たち。



防災教育パズル。完成すると、地震で想定される状況が絵で理解できる。

トルコのように災害の多い国では、災害に備えることはとても重要です。そのためにも、災害教育の必要性を多くの人に知ってもらうために、これからも活動を続けま



エスマ・フリエ・バルシュさん



トルコJICA帰国研修員同窓会 会長 (2016年～)
ハサン・アタルさん
(アンカラ大学農学部学部長)

3代の同窓会会長がそろった。左から初代会長ルヒ・エシルゲンさん、現会長のハサン・アタルさん、2代目会長のフセイン・ヴェリオールさん。

同窓会の活動は、農業や水産業、防災、保健、エネルギー、廃棄物、放送などの分野で、日本の労働規律や革新的な技術を取り入れるために、大きな役割を果たしています。歴史的に親日家が多いトルコで、同窓会の活動は日本の文化の理解と両国の友好関係に大きく貢献すると考えています

同窓会とJICAトルコ事務所の間をつなぐオズダマルさん。

オンラインで積極的に活動を継続

20年は新型コロナウイルスの感染が世界中で拡大した。同窓会への影響はどうだったのだろうか。オズダマルさんに聞くと「たしかに大変な状況ですが、オンラインを活用したセミナーを月に1回以上開催し、活動を止めないようにしました」と返ってきた。非常時だからこそつながりをより強めるという決意がうかがえる。

さらにオンラインでの開催で、地理的に遠い人たちや日本在住の研修コースリーダーが参加できるようになった。同窓会はこの機会を新しいチャレンジの時ととらえて、今年には防災分野でイランなど他国の帰国研修員とともに開催するオンラインセミナーを企画するつもりだという。「トルコと同じ課題を抱えている国はほかにもあります。日本で学んだ経験を共有できる帰国研修員が、国を超えてつながることですらなる学びが生まれると思います」。同窓会の今後の活動に注目だ。



優秀賞 今、私達にできること。
近藤史門さん

簡易水道の設置で水くみから解放されたエチオピアの女性たちが、生計向上のためになができるか真剣に、ときにぶつかり合いながら語り合っている場面です。主体的に行動することで、女性たちの人生や村が変わっていくことを感じました。



最優秀賞 手づくりの落ち葉堆肥箱はみんなの宝もの
NPO Nature Center Risen 宮川皓子さん

カンボジアの幼稚園教員養成校で、環境改善活動の一つとして作った落ち葉堆肥箱が完成した場面です。教官と学生が協力して、土台からレンガの積み上げまですべて手作り。環境教育は知識だけでなく、行動をともって初めて身につきます。気持ちと行動が一緒になり喜びが爆発した、その瞬間を撮影しました。



優秀賞 さあ、手を洗おう！
ILOフィリピン事務所

フィリピン・ミンダナオで、国際労働機関 (ILO) が協力し住民たちの手によって水道が完成しました。今まで水くみをしていた子どもたちが、さっそく水道で手を洗って大喜び。手洗いは、新型コロナの感染防止にも重要です。



優秀賞 持続可能なカンボジアを考える
山岸真喜子さん

JICA青年海外協力隊として赴任した小学校教員養成学校での一コマです。散乱するごみを減らし、町をきれいにする方法を考える授業の一環で、学生たちはさまざまな素材が土に還るまでの時間を真剣に予想しました。

Q₃ EARTH CAMPでも
A₃ フォトコンテストを開催したの？
「輪になって語ろう。地球の未来。」をテーマに作品を募集しました。受賞作は外務省のウェブサイトで公開しています。

「グローバルフェスタJAPAN」では、会場で写真展を開催して受賞作品などを多数展示していました。EARTH CAMPはオンライン上での開催ということで、募集するかどうかざりざりまで迷いましたが、楽しみにされている方も多

いため開催を決めました。募集期間が短くなってしまい、応募作品は例年よりも少なかったのですが、国内外からバラエティ豊かな作品が集まりました。その分、選考が難しく、どの作品にも受賞の可能性があったと思います。

今回、最優秀賞1点、優秀賞3点を選び、1月31日に表彰式を行い、その模様をオンラインで配信しました。1名はリモートでの参加でしたが、ほか3名には会場で、植野篤志国際協力局局長より賞状を手渡すことができました。受賞作と最終選考を通過した作品13点は、現在外務省のウェブサイトに掲載されています。



左から宮川さん、植野局長、山岸さん、ILOフィリピン事務所代理の高崎駐日代表。

リモートで参加した近藤さん。

EARTH CAMP
外務省フォトコンテスト
(結果発表)



Q₁ EARTH CAMPは、
A₁ 1 どんなキャンペーン？

新型コロナウイルス感染症が広がる今、あらためて国際協力について考える多様なオンラインイベントを実施しています。

2020年は新型コロナ感染拡大の影響で、外務省とJICA、NPO国際協力NGOセンター (JANIC) が長年にわたって共催してきた国際協力の屋外イベント「グローバルフェスタJAPAN」を開催することができませんでした。新型コロナへの対策に追われ、他国に関心を向けにくい雰囲気が世界的に生まれているのも事実ですが、一方で新型コロナとその負の影響を乗り越え、より強い社会をつくるために、今こそ世界がつながらなければとい

う声も上がっています。

そこで、日本国内での国際協力への関心が途切れないように企画されたのがEARTH CAMPです。「国際協力の日」にあたる20年10月6日から21年3月31日までをキャンペーン期間とし、国際協力に関わるさまざまなオンラインイベントを開催、紹介しています。テーマは「輪になって語ろう。地球の未来。」ぜひウェブサイトにもアクセスしてみてください。



Q₂ 外務省主催の
A₂ 2 注目プログラムは？
写真の力で国際協力を伝えるフォトコンテストです。

「グローバルフェスタJAPAN」では、毎年外務省がフォトコンテストを主催してきました。10年以上継続する中で、アフリカ開発会議が開催される年は「成長するアフリカと日本」というように、時宜に合ったテーマを設定して作品を募集してきました。毎年200点近い作品が全国から集まる人気のコンテストです。

写真のよさは、一目で現場の雰囲気が伝わること。現場に行くことはできなくても、写真を通して国際協力を身近に感じてもらうことができます。また撮影する人にとっても、写真は取り組みやすい表現方法ではないかと思いま

す。最近ではスマートフォンが普及して、写真はとても身近なものになっています。途上国の現場で体験したこと、感じたことを多くの人に伝える——そうした役割を写真に期待したいと思います。



©DLE



©DLE 外務省ODA
広報キャラクター
ODAマン

教えて! 外務省 /
知っておきたい
国際協力³⁰

現在、オンライン上で開催されているEARTH CAMP。国際協力に関するさまざまなイベントを展開中です。

今月のテーマ

輪になって語ろう。地球の未来。
EARTH CAMP
アース
キャンプ

答えてくれた人



外務省 国際協力局
政策課 事務官

古城勇人 (ふるじょう・はやと) さん
大手ゼネコン勤務、在エジプト日本国大使館派遣員を経て2018年外務省入省。G20サミット事務局などを経て、19年11月より現職。

JICAカレンダー 2021 SELECT BOOKS & MOVIE

本の新着情報



『世界の台所探検 料理から暮らしと社会がみえる』

本書は“世界の台所探検家”として各地をめぐっている著者がこれまで訪問したインドやオーストラリア、キューバ、ボツワナ、パレスチナなど約16か国の食と旅についてつづったもの。日本ではあまり知られていない各国のレシピや、現地ですべて使われている変わった調理道具なども紹介。現地の人と一緒に料理や食事をした体験談からは、観光ガイドブックとはひと味違った日常や文化を知ることができる。

●『世界の台所探検
料理から暮らしと社会がみえる』

岡根谷 実里 著／青幻舎
2,200円(税込み)

読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

『泥んこ、危険も生きる力に ないないづくしの里山学校』

今月号23ページで紹介した写真家の岡本央さんは、長年ライフワークとして「自然と風土に遊び学び、働く」、世界の子どもたちをテーマに撮影を続けている。本書は約10年にわたり、千葉県の本木津社会館保育園が運営する里山学校の様子を撮影したフォトボルタージュだ。市販の遊び道具や時間割も、指示を出す大人もいない環境で、たき火や泥遊びなど自然を通して生きる力を育む子どもたち。里山学校を始めた園長などの言葉を交えながら、自然の偉大さと子どもたちのたくましさ伝える。



●『泥んこ、危険も生きる力に
ないないづくしの里山学校』

岡本 央 著／家の光協会
1,540円(税込み)

読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

『超えてみようよ! 境界線 アフリカ・アジア、そして車イスで 考えた援助すること・されること』

20代後半に青年海外協力隊に参加し、その後もフィリピンやカンボジア、ルワンダで理科教育向上の国際協力に取り組んでいた著者は、いくたびも国境を越えるなかで差別や偏見などといった“境界線”に直面する。2014年にルワンダで大事故に遭い、次に出会ったのは“障害”という境界線だった。援助する側と援助される側——さまざまな経験を積み重ねた著者の体験談からリアルな国際協力の現場が見えてくる。



青年海外協力隊事務局
小林広幸事務局長 推薦コメント!

多様性と共生の実現に向けて試行錯誤するなか、手元に届いた村山さんのカラフルですてきな本。その国の香りや食べ物のおいしさまでも伝わってくるようなエピソードに元気をもらえました。そしてタイトル通り「もっと超えていきたいな〜!」と思わせてくれます。海外協力隊や国際協力に関わる方、障害と向き合う方、すべての冒険者と若者たちにお薦めします。

読者
プレゼント
詳細は
p.38へ

●『超えてみようよ! 境界線
アフリカ・アジア、そして車イスで
考えた援助すること・されること』

村山 哲也 著／かもがわ出版
2,200円(税込み)

映画の新着情報

『ブータン 山の教室』



ヒマラヤ山脈の標高4,800メートル地点にあるブータンの秘境ルナナ村を舞台に、都会から来た若い教員と村人の交流を描いた作品。電気やトイレトペーパーもない土地で、大自然とともにある日常に幸せを見つけて生きる大人たちと、親の仕事を手伝いながら学ぶことに純粋な好奇心

を向ける子どもたちを、大自然の映像美とともに伝える。2005年の国勢調査で国民の97パーセントが「幸せ」と答えたことなどから“幸せの国”と呼ばれるようになった同国の、シンプルながらも貴重な暮らしから本当の幸せとは何かを問いかける。



●『ブータン 山の教室』

2019年／ブータン／110分
監督・脚本：パオ・チョニン・ドルジ
配給：ドマ
2021年4月3日より、岩波ホールほか
全国で順次公開。

詳細はこちら



©2019 ALL RIGHTS RESERVED



2021年4月から 広報誌『mundi』は隔月刊となります!

月刊誌として発行してまいりました『mundi』は、2021年4月から隔月刊となります。英語版と仏語版『JICA's World』は、今まで通り季刊での発行です。

よりわかりやすく、また、PCやスマートフォンなどからも閲覧しやすい形で多くみなさまにお届けできるよう、さらなるパワーアップを図ってまいります。また、新しい楽しみ方として、イベントなども予定しています。

今後もいっそう良質な情報の発信に努めてまいりますので、変わらぬご愛読をお願い申し上げます。

【4月号以降の発行スケジュール(2021年度)】

2021年4月、6月、8月、10月、12月、2022年2月
(英語版、仏語版は2021年4月、7月、10月、1月)

【定期送本の金額(送料のみ)について】

定期送本のコースが下記のように変更となります。

現在：6か月 1,100円(税込み)、12か月 2,200円(税込み)



変更後：1年間(6冊分)1,100円(税込み)

* これまでに定期送本をご契約いただいている方には残り回数分をお送りいたします。

隔月刊化に関する問い合わせ先『mundi』編集部：ML_JICAPR@jica.go.jp

JICA海外協力隊(長期派遣) 2021年春募集を実施します! ~募集説明会を開催~

募集期間：2021年5月20日(木)～6月30日(水)

JICA海外協力隊の春募集に合わせてオンライン説明会と会場型説明会が開催されます。

2020年3月以降、世界規模で新型コロナウイルス感染症が拡大している状況をふまえ、派遣中のJICA海外協力隊は一時帰国となり、派遣前の訓練や募集なども延期や変更をすることになりました。

状況が大きく変わったJICAボランティア事業ですが、JICAはODA実施機関として、感染症対策を含む国際貢献において日本の責任と役割を果たすため、安全と健康に留意しつつ、条件の整った国からJICA関係者の現地帰任、また、職員や専門家については新規渡航も再開し始めています。協力隊員についてもコロナ禍における新規渡航再開の可能性につ

いて慎重に検討を進め、渡航再開が順次決定しています。

説明会では、現地での生活や帰国後の就職について、協力隊経験者に直接相談できることはもちろん、コロナ禍における活動や今後の動向なども説明いたします。応募を検討している人だけでなく、JICAの国際協力に興味がある人や、家族が応募を検討している人の参加も可能です。ビデオ会議システム「Zoom」を使用したオンライン説明会も充実しておりますので、お気軽にご参加ください。

コロナ禍下の今だからこそ、自身の経験や技術を生かし、国際協力の第一歩を踏み出そう!

説明会の情報は
こちらから



春募集の詳細は
こちらから



JICA全体の
新型コロナウイルスへの
対応について



広報室から

本誌で12年にわたり連載されている「地球ギャラリー」。本誌を手にとった最初はこの記事を読むという読者の方も多いのではないのでしょうか。かくいう私も、毎号掲載される地球の壮大さを感じさせる風景や、そこに暮らす人々の力強い姿を映し出す写真にいつも心を奪われます。

性能のよいスマートフォンで簡単に写真が撮影できるようになり、SNSには凝った写真があふれている現代ですが、それらの写真が単純に一瞬の風景を切り取ったものであるのに比べ、プロの写真家の作品からは、写真の中の視覚的な情報以上の情景が立ち上がってきて、感情を揺さぶられる気がします。

1月31日にJICAが開催したオンラインイベント「地球ギャラリー写真で旅する世界」に登場してくださったヤマザキマリさんは、「地球ギャラリー」の写真をご覧になって「一枚の写真から、漫画を1編描くことができそう」とおっしゃっていました。またオンラインイベント（今号24〜25ページで紹介）では、写真家の清水匡さん、桜木奈央さんがなぜ自分たちは写真を撮影するのかを語ってくださいました。お二人のお話からは、被写体となっている人、またその人たちが住む国に対する強い愛情と関心、尊敬の念をお二人が持っていること、またその人たちの生きる姿をありのままに伝えたいという強い思いが伝わってきました。「地球ギャラリー」の写真は、そこで生きる人々を深く理解し、その人たちの思いをくみ取って読者に届けようとする写真家の視線を通して見る風景だからこそ、多くのことを私たちに教えてくれるのだと思います。

このすばらしい世界をもっと楽しんでいただきたくて、JICAはウェブサイトで「写真で旅する世界」コーナーを公開しました。ここでは、写真家の方がインタビュー動画もあります。写真だけではなく、写真家の言葉にも触れ、その視線の向こうに思いを馳せていただけたら幸いです。

広報室長 井本佐智子

《アンケートのお願い》

プレゼント付き

JICAや記事内容についてのご意見、ご感想をお待ちしております。また、こんな企画を実施してほしいなどのご希望もぜひお寄せください。お寄せくださった方の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。下記項目をお書き添えのうえ、巻末のアンケートはがき、Eメール、またはファクスでお送りください。

●氏名 ●住所 ●電話番号 ●年齢 ●性別（自由回答） ●職業 ●本誌を入手した場所 ●面白かった記事 ●本誌へのご意見・ご感想 ●JICAへのご意見・ご質問 ●ご希望のプレゼント番号
*お寄せくださったご意見・ご感想は、本誌やJICAのウェブサイトに転載する場合があります。あらかじめご了承ください。ご記入いただいた個人情報、プレゼントの発送および誌面の向上に役立てること以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

◎応募締め切り 2021年4月15日

[2021年3月号のプレゼント]



① 書籍
『世界の台所探検 料理から暮らしと社会がみえる』
岡根谷実里 著/青幻舎
1名さま



② 書籍
『泥んこ、危険も生きる力に
ないないづくしの里山学校』
岡本 央 著/家の光協会
3名さま



③ 書籍
『超えてみようよ! 境界線
アフリカ・アジア、そして車イスで考えた
援助すること・されること』
村山哲也 著/かまがわ出版
1名さま

mundi

MARCH 2021 No.90

編集・発行：独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency (JICA)
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
Eメール：ML_JICAPR@jica.go.jp
URL：https://www.jica.go.jp/

制作協力：株式会社 木楽舎
〒104-0044 東京都中央区明石町11-15
ミキジ明石町ビル6F『mundi』編集部
TEL：03-3524-9572 Eメール：ML_JICAPR@jica.go.jp

- アンケートの送付、定期送本、バックナンバーの取り寄せに関するお問い合わせは木楽舎までお寄せください。
- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

定期送本のご案内

●申し込み方法

巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送本期間・送付開始月号を明記のうえ、所定の金額（送料+手数料）を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送の手配をいたします。入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください。

*2021年4月から隔月刊となります。とじ込みの払込取扱票には「12か月（2,200円/税込）」と「6か月（1,100円/税込）」の「どちらかに○印を」との記述がありますが、この号以降、お申し込みは1年分（6冊分）のみの受け付けとなります。払込取扱票では暫定的に「6か月（1,100円/税込）」に○をつけてくださいますようお願いいたします。



次号予告 (2021年4月1日発行予定)

4月号 特集 金融 ～みんなのおカネ～ (仮題)

お金は人間の血液と同じ、流れるべきところに流れてこそ生活を健全に営むことができます。新型コロナウイルスの影響でさらにお金が届きにくい状況になっている人たちも多くなるなかで、JICAの金融に関連した取り組みを紹介します。



『mundi』バックナンバーはJICAのウェブサイトでもご覧になれます。

JICA mundi

検索

<https://www.jica.go.jp/publication/mundi>

ネパールで地震に強い 安全な建物の建設を推進



2019年に撮影した、カトマンズ盆地の工事現場の様子。

2021年4月にJICAは、将来の地震発生により建物倒壊などの大きな被害が予測されているネパールのカトマンズ盆地において、建物の耐震強化に向けた協力を開始する。

15年に発生したカトマンズの西約76キロメートルを震源とするマグニチュード7.8の地震では、約80万戸の家屋が全壊または損壊。現在カトマンズ盆地では石やレンガを積み上げた工法よりも地震に強い鉄筋コンクリート造の建物

が主流となっているが、建築技術者や建築主の知識不足、法令遵守の意識の低さから、建物が基準通りに建設されていないことが多い。

JICAは震災直後から現在に至るまで切れ目なく復旧・復興に協力している。今回は被災現場での協力を超えて、将来の自然災害に備えて建設に関わる関係者の能力強化と啓発活動を行うことで、地震に強い安全な建物の建設を推進し、今後の震災リスク軽減を目指す。

ニュース深掘り! 日本の教訓・技術を途上国へつなぎたい

ネパールのカトマンズ盆地では、地震の発生リスクが高いにもかかわらず建築基準遵守などの対策が進んでいない状況です。惨事をくり返さないよう災害に強い国へと生まれ変わるには、地震に強い建物の建設が非常に重要です。そのために今回、建設に関わる行政官のみならず正しい知識と技術者倫理を備えた民間の建築技術者の育成を行います。さらに、優良建物の認証制度や住宅ローンの特例措置など、地震に強い建物の建設を進めやすいような仕組みも検討します。ネパールと同じ地震大国である日本は、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの経験から、高い建築技術と防災意識を育んできました。この日本での復旧・復興への取り組みや、得られた知見・教訓をネパールにも生かすべく、現地の事情や災害リスクに合わせた支援を行い、意識啓発にも取り組む予定です。

今回は特に新築される建物の数も人口も多いうカトマンズ盆地を対象に行っていますが、このプロジェクトで改善された建築許可の仕組みや培った技術が他の地域へも広がり、ネパールの安全・安心なまちづくりにつながるよう、これからも現地スタッフとともに歩みを続けていきたいと思います。

社会基盤部
都市・地域開発グループ
第1チーム

山本 朋子さん(左)
やまもとともこ

2019年にジュニア専門員としてJICA入構。21年3月より、ラオス都市計画専門家。技術士(建設)・一級建築士。

ネパール事務所NS
(ナショナルスタッフ)

バンダリ・ラムさん(右)

今回の案件形成に尽力。地震発生直後から、現地の復興支援に重要な役割を担っている。



JICA HEADLINE NEWS

2月4日 | ▶ **Bangladesh 日本が開発協力で初めて同国の食品安全分野を支援**

食品汚染による健康への影響が懸念されている同国で、食品安全管理体制の向上を目指す。

2月2日 | ▶ **Indonesia 漁港施設・市場の整備を通し、離島の水産業の活性化に協力**

政府による整備計画に対し財政支援。水産物の付加価値向上や島外への流通を推進。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>



11.住み続けられるまちづくりを
17.パートナーシップで目標を達成しよう



市立前橋高等学校の取り組み「めぶけ! グローバルな高校生へ」。その一環の特別授業には1年生238名が参加した。

地元の未来を高校生が描く

高校生と遠く離れた南スーダン共和国がつながる——日本人も外国人もみんながともに生きる社会を目指し、高校生がさまざまなチャレンジを行っている。

群馬県前橋市はホストタウン*として、オリンピック・パラリンピック出場予定の南スーダン共和国の陸上競技の選手団5名を、2019年11月から長期で受け入れている。また、市立前橋高等学校では、「めぶけ! グローバルな高校生へ」と題し、少子高齢化に伴う人口減少に加え、卒業後の地元離れを食い止めたいと地元を目を向ける取り組みを始めている。

その一つが、前橋市で生活をする外国人との国際文化交流会。南スーダン選手団をはじめ外国人留学生や技能実習生にも参加してもらい、「日本や日本人に対して驚いたことは?」「母国に帰って帰りたい前橋市のお土産は?」といった高校生ならではの視点で質問し、新たな地元の姿を探っていく。「外国人から日本人へのアドバイスは?」との質問には「言いたいことをもっとはっきりと言ってほしい」という回答があり、高校生たちも深くうなずいていた。外国人から日本と異なる文化を聞き、客観的に日本を知ること、前橋市活性化の芽を探る貴重な機会となった。身近な世界とのつながりに目を向け、外国人も日本人もだれもがともに生きる社会、住み続けられる社会を目指す高校生の挑戦は、SDGs 17のパートナーシップのみならず、あらゆるゴールの基礎になるはずだ。

*東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、日本の地方自治体が大々参加国や地域との交流を深める取り組み。

今月の投稿(文と写真) 佐藤祥平さん

青年海外協力隊2015年2次隊としてバングラデシュとジンバブエにサッカー指導員として派遣される。帰国後、18年2月から群馬JICAデスク国際協力推進員、19年10月から南スーダン応援委員会の委員長も兼任。

あなたの投稿をお待ちしています!

「わたしが見つけたSDGs」に写真と文章をお寄せください。貧困や気候変動、格差ほか、いま世界が直面している課題やその解決に向けた取り組みのエピソードなど、SDGsの17の目標を身近に感じられる作品をお寄せください。

応募要項:写真1点(ご自身が撮影されたもの)、文字原稿400字以内。

*写真内の被写体に関する肖像権およびその他の権利は、投稿者の責任において被写体や権利保持者の承諾を得るなど必要な措置をとったうえでご応募ください。

ご応募・お問い合わせ先 ▶ ML_JICAPR@jica.go.jp (「mundi」編集部宛て)



SDGsとは

持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)は「誰一人取り残さない」をスローガンに、格差や貧困、環境破壊など世界が直面している問題の根本的な解決を目指す17分野の国際目標。

持続可能な開発目標(SDGs)と
JICAの取り組み

